

## 書評

北山茂夫著

## 萬葉の世紀

日本の多くの古典が、これまでどんなに古典研究家といわれる学者・文人の手によつてゆがめられ、またきづつけられてきたかは、戦時中のあの「古典精神」の一方的呼号を耳にしてきたものの追憶に、まぎ／＼とよみがえつてくるところである。特に「万葉集の精神」は、ある時は「草莽の心」「慟哭の文学」として力説され、ある時は「國民精神の結晶」として礼讃をあげ、日本ロマン派やアララギ派の文学論や、短歌の実作とからまりあいながら、強く時人の心をひきつけたのであった。そしてそれは、「近代のよすが」としてさえ、美辭麗句のなかに昇華され、最大限にウルトラ・ナシヨナリズムのために利用されてきた。

今日國民文学の問題が、現実的課題をふま

えて、新しい視角から論じられつつあるが、万葉集がいつたい現代の國民にとつて、「文化遺産」としてどのような意味をもち、どのようにうけつがねばならぬかということ、かつての万葉論の影響力が大きければ大きいだけ、きわめて切実な問題としてわれわれに迫つてくるわけである。「日本ロマン派」らとの対決をさけて、その止揚に望むべくもないし、またその批判がいわゆる近代主義的アンチ・テーゼにおわつてはならないことも、いまさら多言するまでもない。

こうした問題を正しく發展させ、万葉集を眞に國民のためのものにするためには、当然その形成の場が論究されなければならないし、また民衆と官僚・貴族の階級的諸關係をぬきにして詩歌の本質に迫ることのできないことは、既にして自明の理である。先に第一論集「奈良朝の政治と民衆」（一九四八・八）を世にとつた著者が、前者において不十分にしか描かれなかつた民衆の動きを、単なる浮浪・逃亡という農民闘争のあり方だけではなくて、徭役に対する不満・たたかいが豪族層に反映、集積され、豪貴族の対立、皇位篡

奪へと内乱の様相をおびて拡大するその根柢に積極的意義をとりえようと、相聞歌をめぐる地方農民集団——その媒介層としての豪族の意義、さらに宮廷貴族集団の皇親政治の確立と危機の中に、万葉誕生の場をほり下げようとされ、ついにその一部をまとめて本書に集成されたのも、前述の諸要請に古代史家としての責任と情熱とをもつて、力強く応えられたものに他ならないと思う。

はたしていわれるように、著者の歴史学よりする万葉論が、「文学の國と法則をふみにじり、文学を歴史の植民地になしつつかある」ものであるか、またその政治史がいわゆる「正史に依拠せられすぎる」ものであるかは、何よりもよくこの書物が、そうした反問に解答をあたえている。

本書は前篇と後篇に分たれ、前篇には万葉集の具体的な作歌についての、文学創造の主体、およびその諸契機が述べられ、万葉の詩歌の誕生する場が歴史的に説明せられており、それ自身史学の論文であると同時に、独自の文学論をかたちづくつてゐる。後篇には著者が最近きわめて精力的になされつつあ

る、古代内乱史の二・三の問題が克明に提起され、近江遷都（六六七年）より壬申の乱（六七二年）をへて、天平末の橘奈良麻呂の変におよぶ一世紀間——万葉の世紀が、皇親政治より貴族政治への移行の内部に——農民闘争と豪族の動きを基軸とする——鋭く論及されている。この書物のなりたちが論文集であるため、その述作に重複があり、また和歌山より京都への移住の間に、方法論の深化と視角の変貌があつて、読者をして若干のとまどいをさせないわけではないが、他書にありがちなわずらわしさを覚えさせないのは、氏独得の文章力と真剣な観察および一貫した思想的立場によるものであろう。末尾に付せられた年表は、古代史研究家は勿論のこと、一般の読者にとつても、詳細かつ明瞭に歴史の歩みをよみとることができるよう、良心的な作製がなされ、前著の年表を修正増補して六四五—八〇五年間の主要事項が列記されており、著者の周到な注意が払われていることも、本書の価値をよりたかからしめている。

いま本書の批判に入るまえに、簡単にその論点を各論についてまずみることにしよう。

前篇のうちで、最も早く公表されたのは、清水三男氏の追悼記念会での講演速記「古代農民の労働と闘争」である。ここには奈良朝における古代農民闘争史の概要が、大化改新から光仁期の政治にいたるまでの歴史の中にまとめられ、徭役労働に苦闘する農民の姿がリアルに描かれようとしている。はたらく民衆のじつたいにふれないで、奴隸制の型をどんなに論議しても、論議が空疎になることを自覚する著者のあせりが、浮浪・逃亡の強調としてあらわれているが、しかし既に万葉の基調としての相聞の意義が重視され、階級的諸關係をぬきにした古代国家二元論の批判がなされていることは、後の多くの論述のプロログが準備されていることと共に読者の見逃しえないところである。（一六八—一七〇頁）

ついで「万葉における慶雲期の諸様相」にあつては、大宝令にもとづく諸制度が、二つの方向——支配者層の私的土地所有の形成と徭役労働にもなう階級分化の進行（筆者註）——から崩されてゆく慶雲期の歴史の意義がみきわめられ、「藤原宮の彼民の作歌について」の具体的研究によつて、大君と御民との階級關係が明確化され、左千夫の「職工の長」——彼民論の辛辣な批判と茂吉の「役民の歌」共作者、助力者としての人蔭論への検討を道じて、「宮廷儀礼の場であつたための制作」（四四頁）としての官人の頌歌である所以が明かにされている。しかもその根柢をなす「現御神の政治観念」が、改新以後のディスポティズムの成立事情——特に万葉盛期と藤原宮——生産享受の場としての宮廷との關係において説明され、卓見が披瀝される。

奈良朝初期の農民闘争との連関のうえに位置づけられた「吞虜問答歌の成立」なる論考には、民衆の動きを「徭役の廃絶から自由な農民的土地所有を志向する進歩的なうごき」としてとらえんとする、新しい視角がうちだされているが（一〇〇頁）、孤立分散的に、公地——公民制のワケ内にしばられる農民が、行基を中心に「百姓集會」をもち、権力闘争へのたちあがりになしつつある点が、ディテールに述べられている。この点は、後篇の「行基論」や「大仏開眼記」の中で、「新しいゆきかたをのぞむ豪族を糾合し、うち捨てられた民衆を動かすしごと」として行基の運

動が評価され、豪族としての背景の析出から、上層農民・豪族を媒介とする民衆の闘争史が、さらに深められてゆくわけだ。

この書物の巻頭を飾る「万葉の世紀」には「万葉は律令初期にうまれた歌の集大成」と規定され、したがってその形成には「大化改新とその後の政治發展が決定的条件」をなしたわけで、徭役と生産との矛盾のなかにあがく万葉盛期の農民の哀切な叫びを東歌のリアリテイにとんだ相聞のひびきに求め、享樂の場としての貴族集団が、礼典、歌舞によつていよ／＼「みやび」化してゆき、貴族官人と民衆の距離は、人麿以後さらに深まつてゆき、風雅への逸脱は、民謡とのしたしいつながらを失つた伝統の集積のみ依存してゆく、万葉詩人の変質過程が、鮮かに描かれてゐる。とりわけ万葉最大の特徴を相聞歌の清新にみちた開花にみ、民謡に映ずる相聞の理解などは、他の追隨を許さぬものがあり、

(一三—一四頁) 万葉末期を代表する政治家文人—家持が、ついに歌わぬ人となつてゆく理由を「天平の内乱となつてあらわれた古代天皇制の危機」に帰せられるあたりは、従来

の諸説を抜んでるものがある。

後篇に収められた「大化の改新と律令体制」においては、改新後の政治史が平安朝への展望という広い視野の下に取扱われているが、「収奪の關係においては、徭役以下がそれら官人・族長(氏・姓をおびる族長身分の層—筆者註)の家族にもおよんできていたところからすれば、未分化なものをそれらの間にのこしていたといわねばならない」という指摘は、(一八二頁) 白鳳文化の一面が、素朴な人民の層につらなつてゐる——族長的地方豪族を媒介として——という所見と共に注目すべきものがある。「班田農民・品部・雑戸・乃至奴婢・家人の多様な闘争」が「貴族・地方豪族乃至上層農民の私有地」と結びついてゆく過程の内部に「生産をになう階層」の前進と新しい歴史的性格の自らによる形成をよみとられんとするのは、前者に比して大いなる展開であるといわねばならぬ。

ところで「壬申の乱前後」や「白鳳末期の諸問題」にいたると、著者の論究する皇親政治の内容とデイスポティックな神統意識のあり方がより一層明かになつてくる。先の論文

では、壬申の乱が大規模な戦争にまで發展した理由を、専制権力と公民との基本的対立において明確化し、皇位襲奪をめぐる「官人・豪族の積極的な参加と、かれらも、政治的危機のなかに、強大な権力者の出現をのぞんでいた事情」の析出から、白鳳の皇親政治のもつデイスポティックな性格が、より詳細に追及され、家持らが「山柿の門」をことさらに問題にしたところに、人麿や赤人にみられる宮廷詩人の類型がみごとに論述される。後の論稿では、長屋王の変にいたる、白鳳の皇親政治の危機と、皇親政治家としての長屋王がうちたおされ、貴族政治の方向へと転換してゆくプロセスが、万葉詩歌との関連の中で叙述されている。この場合著者が慶雲期—和銅期、養老期—天平期と律令体制のワクを破つて伸びてゆく農民の公地—公民制からの離脱を發展的にとらえられているのは、見逃しえない点である。(二三九頁) この書物には、

大映「大仏開眼」に歴史考証を担当した著者の体験録や、一九五二年度歴史学研究大会に対する批判文「最近の歴史学界における主潮」がのせられているが、大仏造立の矛盾

を、行基の弟子である天才の非業の最期や東歌の相聞のころを通して、民衆のがわから体現しようとする著者の努力は、文章ににじみでる教条主義への批判と共に、よくその風格を伝えるものがある。

以上のべてきたように、本書のもつ古代史学に寄与する業績は、まことに多大であり、社会構成史への警告と批判は、全篇にみながつている。万葉論をめぐるファシズムへの対決を、農民闘争の中に求め、古代国家二元論への検討を、デスポット——豪族・農民の基本的な階級関係の矛盾のうえに展開せんとする著者の努力は、それなりに多くの成果をおげたといふことができる。その論の賛否を問わず、いま北山氏の所論をぬぎに古代政治史を論じえないまでに、その説得力のものが影響は大きい。けれども、そこにはまだ残された問題点や未解決な分野が、問題作なりに内包されている。以下所見をのべて、著者の御教示を得たい。

まず第一には、文学創造の契機に關しての問題である。生産と享受とはまるつきり別のことであつたとされ、宮廷が享受の中心であ

り、(六一頁)、農民は徭役と生産との矛盾のなかにあがき、たたかつていつたことに(四頁)勿論異論はないが、「民衆は宮廷の繁栄に何らあずからなかつた。いやかえつてその繁栄を支えて犠牲となつたのだが、貴族らの文学は直接的経験にもとづいて、つくり、自他の作をひろく受容して生活の愉悅をさかんにしたため、民謡のなからもかれらの共感をよぶ相聞歌を採集しあるいはそれを洗練し、そうしたもののが万葉集の独特の部分を形成している」(一六頁)といわれている点は、黙過するわけにゆかない。著書の所見にしたがえば、挽歌の基調としての相聞的情緒、あるいは貴族集団と民謡とのつながりは、直接的経験にもとづいて採集され、創造されたことになるわけだが、この直接的経験の歴史的内容を明かにしない限りは、人麿の抒情詩人としての偉大さ「妻死せし後泣血哀慟して作れる歌」(巻二二〇七)と東歌にみられる民謡の相聞や、更に「事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひそ吾が背」(巻一六一三八〇六)、あるいは「言痛けば小泊瀬山の石城にも幸て寵らむ

恋ひそ吾妹」(常陸風土記)などとうたわれた農民の哀切な叫びとのへだたりは、少しも明かになつてこない。したがつてまた宮廷詩人のあいだに「直接的経験をばなれ伝統の集積に依存してゆく」事情が、(二二頁)いまま一步われわれに迫つてこないのでもあらう。皇子等、王等、百官人等、天下公民と區別されながら、族長の家族もまた専制國家の収奪にさらされ、社会的に未分化なものをもちながら、権力支配の支柱として官人層に組み入れられていつた、デイスボティックな支配の実態の中で、人麿が「生活感情をたたえた民謡を詩のゆたかな源泉として汲み出し加工した」理由、(二一八頁)相聞においてのみ、宮廷と民間に細い交流を保ちえた理由が、その直接的経験の内容としてほり下げられなければならない。「へだたり」と「つながり」の二重性は明かにならず、舍人等にとつて天武天皇が「彼等に残存した彼等の英雄であり」、詩人天武天皇が「民謡との創作上の交感現象」の上に作歌するという高木・西郷両氏らの所見を完全に論破しえないのではなからうか。この点は宮野の宮を詠じた人麿の二面性

すなわち一は現御神の呪縛に深くうちかけられ、一は天皇を神そのものであることをまろで忘れ去つてしまつたように作歌される態度（四五頁）、声調の興を流れている沈痛のひびき（近江荒都の歌や「ものふの八十氏河の綱代木にいさよふ波の行方しらずも」などと藤原宮における快いリズムの幸福そうな連作（四〇—四二）の差異をはつきりさせるしごととも関連している。ここに著者の「人塵論」の展開が期待される所以がある。そしてそのことが、「山柿の門」といわれながら、白鳳風の宮廷詩の内部で、人麿と赤人の歌風のちがいを明かにすることにもなり、憶良との系列の相違をみきわめてゆく足場となりうるのではなからうか。

第二の点は、相聞をめぐる農民集団の問題についてである。「腰の仲子」的アトモスフィアを媒介として、相聞は上昇転化していつたのであるかもしれないが、東歌などにあらわれる相聞の理解を、「家族関係の特殊なあり方」——夫婦別居のみに求めることがはたして可能であろうか。徭役による徵発に対して、ひとつの抵抗関係が、夫婦別居の残存の

中に見られることは事實であらうが、（一四頁）むしろ問題は夫婦別居にもとづく本源的人間性のロマンスにあるのではなくて、そうした生活を余儀なくされた徭役への哀訴が、相聞のおよらかな、清純な恋歌への発展を阻害している点を見逃すことはできないのではなからうか。激烈な万葉人的ロマンスを人間性一般に解消することは勿論できないし、夫婦別居論（七〇頁）のみからは、農民の歌声が、歡喜の歌声が、歡喜の歌声でなく「なげきの叫び」である理由は、更に具体化してこないように思われる。同じく相聞といわれても末期の家持らの恋のなげきと異なるわけを、いま少し具体的に説得される必要があるのではないか。この点で「えだち」の大きなしごとでもあつた「防人」の歌への論及が待望され、そうした点への論述の不足が、折角の所論を挫折せしめている感がないではない。

第三の点は、豪族・上層農民の把握のしかたについてである。氏や姓をおびる前代の族長層は、デイスボティックな支配機構の中に、取巻をうけながら、官人層としてその支柱と

なつてゆくわけであるが、この場合中央豪族乃至官僚貴族と地方豪族（国造—郡司）との歴史的把握があまりまいであり、社会未分化とはいふものの、その間に發展差があつた筈であり、また民衆の側にたつ族長的性格が、世襲的王権の確立によつて、それ自身デイスボティックなものへの傾斜をもつたとしても、五六世紀より七八世紀へかけての公地—公民制の貫徹と矛盾の激発の中で、支配者—官人層の権力支配との関係は、その間に階級的分裂と動揺をひきおこしていつた筈である。その点著者が、官僚豪貴族として、アプリアリにとらえられているきらいがないわけではない。壬申の乱が宮廷内の反対派貴族、官人、地方豪族らの呼応によつて拡大されていつたに違いないが、（二一九頁）なぜ天武朝が勝利することができたかということは、単にデイスボティックな神統意識の昂りや歴史の偶然に帰することができない筈である。この場合にもやはり近江朝を支持する貴族、官人層と大海人皇子の皇位簒奪に呼応する貴族・官人・地方豪族の相違が、一応は論じられねばならないのではないか。でないといふ農民層にみ

なざる不満は、所詮不満としてとどまり、乱後におけるたたかひの前進・生長の意義は過少評価されることになるのではなからうか。

このことは、行基論をめぐる上層農民の問題とも関連している。「いわゆる浮浪のなかに得度を求める上層農民の子弟がふえ」（一〇四頁）「玉臣の力をかりて資人となり、また得度の便をもとめ、ありていにいえば、かれらは課役をのがれ、その上に何らかの特権にありつこうとして」（二五四頁）行基らのもとに集うのだが、この時、中・下戸の民衆たちは、いつたいどのように行基運動の中に位置づけられていたのか。慶雲—和銅、養老—天平と階級分化の進行にともなう等外戸や下戸の増大を考える時、こうした上層農民とかれらはどのように提携したのか、限られた史料ではあるが、私的土地所有の拡大と結合ということばの意味を、もつと発掘してゆく必要があり、初期庄園の萌芽の問題を併せて今後追究してゆく必要がある。これまでの「古代家族」とか「共同体」というあいまいな概念をさけて、問題をほり下げられた著者の叙述に、なお民衆がうかんでこないといわれる

とするならば、それは中・下戸ら下層農民の歴史的發展とたたかひへの参加の実相についてであろうか。いまもしこうした点が明かにせられうるならば、大仏造立を矛盾の相としてとらえるしごとが、もつとリアルに描かれるのではなからうか。ともあれ、万葉年代を近江遷都後の一世記間に求められた著者の卓見は、今後なお多くの検討をへて、発展的に継受されねばならぬと考えるが、最後に二つの疑問点を記しておきたい。その一は、慶雲期の疑問点を記して、既に人麿の詠歌に反映されているとされるが、（七四頁）その歴史事情はも少しディテールに描かれる必要がないかということ、他の一は養老律令の完成—貴族社会とはいふもの、一応律令体制の修補、維持がなされてゆくプロセスと関連して、皇親政治を支柱とするデイスボティズムのあり方と、律令体制とよばれる歴史的内容とは一応きりはなして考慮する必要があるのではなにかという素朴な疑問である。

著者の論述が、三一六世紀の見透しというえにたてられながら、なお公に所論の展開をみ

なかつたことと、本書の性質上是非収録してほしかつた「白鳳の宮廷詩人」（万葉七）の労作が、のらなかつたことを、本書のために惜しむものの一人であるが、第三論集の刊行と英雄時代論の具体的論究を、いま強く切望する。ひごろ著者の学恩をうけるものとして、二・三の疑問点をのべて御示教を仰ぐ次第であるが、筆者の浅学の故に、論点を誤解した点があるならば、御寛恕を願いたい。

——上田正昭——

W. F. Le Gros Clark

: History of the Primates (1949)

British Museum (Natural History) 発行の同博物館地質学部案内書のひとつである本書は、化石人類研究の入門書としてもすぐれている。著者は本書の前半で読者に問題の理解に必要な基礎的知識を与えようとする。動物界分類とその進化論的意義、自然淘汰、人類の進化の過程、それを証拠づける化石資料、化石を使つて行う議論に必要な地質年代、等につき説明し、古生物学者が化石した